

第8章 近代ヨーロッパの成立

1. 大航海時代

十字軍、マルコ・ポーロ「東方見聞録」以来、東洋文化への関心が高まる。
国土回復運動を通じてイスラム世界と接触があったスペイン・ポルトガルにおいて、
航海術が進歩（羅針盤、快速帆船）し、遠洋航海が可能になる。
香辛料の需要が高まる一方、オスマン帝国の地中海制覇→新航路開拓へ

<ポルトガル>

航海王子 エンリケ (1394-1460)、国王ジョアン2世 (1481-95)
アフリカ西岸の探検奨励

◇アジア

1488 バルトロメウ・ディアス、アフリカ南端の 喜望峰 に到達

1498 ヴァスコ・ダ・ガマ、インドの カリカット に到達

アフリカ東岸マリンディ経由、ムスリムの水先案内人をのせて
= “新航路の発見” ……首都リスボンはアジア貿易の独占で栄える

◇新大陸

1500 カブラル、ブラジルに漂着し、そこをポルトガル領と宣言

<スペイン>

◇新大陸

1492 コロンブス (ジェノヴァ出身、Cristoforo Colombo)

フィレンツェの学者 トスカネリ の地球球体説に影響を受ける
スペイン女王 イザベル の後援を受け、西周りでインドをめざす。

サンサルバドル 島 (バハマ諸島) に到達

以後3回の航海でアメリカ大陸にも到達

彼自身はそこをインドと信じ、原住民を“インディオ”と命名

※コロンブスの航海の歴史的意義とは？

新大陸の発見にあるのではなく

教義・常識を行動によって覆したことにある

1499 アメリゴ・ヴェスプッチ (フィレンツェ) の探検

インドではないことが明らかとなり、彼の名から「アメリカ」の地名

1513 バルボア (スペイン人)、パナマ地峡横断し太平洋に到達

Fernão de Magalhães

1519-22 マゼラン (ポルトガル人、マガリャンイス) による世界周航

マゼラン海峡から「太平洋」(=彼が命名) へ

1521年、彼自身はフィリピンで原住民との戦闘で戦死
部下は航海を続け世界周航に成功・地球球体説を実証

※マゼランを戦死させたラプラブは

「ヨーロッパ人による最初の侵略を撃退した」として

フィリピンでは英雄とされている

◇アジア

1565 レガスピ、セブ島上陸、さらにルソン島占領

フェリペ2世の名にちなみ「フィリピン」と命名

1571 フィリピン総督府設置

<イギリスの北米探検>

1497-98 カボット (イタリア人)

ヘンリ7世の命令で、ニューファンドランド・北米東海岸探検

<スペインによる中南米侵略>

※征服者たち（コンキスタドール）による侵略

1521 コルテス、メキシコのアステカ帝国を滅ぼす
（ユカタン半島のマヤ文明は時代がもっと前）

1533 ピサロ、ペルーのインカ帝国を滅ぼす

※より狂暴・野蛮な文明が、柔和な文明を滅ぼした

1545 ポトシ 銀山発見（現ボリビア、露天掘り）
インディオや黒人奴隷の酷使 → 価格革命

▼ 銀山や農場などで、インディオの強制労働（エンコミエンダ制）
※現在もスペイン系大農場経営者が中南米の支配階級
先住民系の人々との経済格差が大きく政治不安の根本原因に

⇨ 聖職者 ラス・カサス（ドミニコ修道会、1484-1566）
1542年、「インディアス破壊小史」で先住民虐待を批判
→ 同年、インディオの奴隷化は禁止

↓

▼ しかし、アフリカからの黒人奴隷の輸入がこれに代わる

<スペイン・ポルトガルの海外貿易の特徴>

ポルトガル…アジア貿易（香辛料など）を独占
スペイン…新大陸から銀を掠奪（重金主義）

両国とも、この富を自国の産業育成に用いなかったことが
のちにオランダ・イギリスなどに追い越される原因となった。

<商業革命と価格革命>

▼ ヨーロッパにおける遠隔地貿易の中心が、地中海から大西洋沿岸諸国へ移り、
アジア・新大陸を含む地球規模に貿易構造が変化 → 商業革命

※ 植民地獲得は、国王と大商人の結託による国家プロジェクト → 王権強化

※ イタリア諸都市の衰退 = イタリア・ルネサンスも終焉
南ドイツの銀山・都市の衰退

▼ ヨーロッパにおける銀の流通量の激増による物価騰貴（インフレーション） = 価格革命

・ 固定地代収入に頼る封建諸侯・騎士の没落
・ 商業資本家による資本蓄積が進む

▼ ガレオン貿易（アカプルコ貿易）

スペインがポトシ銀山など新大陸の銀を、メキシコのアカプルコから
ガレオン船でフィリピン（マニラ）まで運んだ貿易
スペインはこの銀を用いて中国の物産を購入

※ 同じくポルトガルは、日本との“南蛮貿易”で利益をあげ、
日本産（石見銀山）の銀を中国へもたらした。

→ これらメキシコ銀・日本銀が中国（明）で流通し、税制が一条鞭法に改革された

※ アメリカ大陸の古代文明については自分でまとめておくこと = 第2章 - 4

2. ルネサンス (Renaissance 仏)

用語……ブルクハルト (1818-97、スイス、『イタリア・ルネサンスの文化』1860)

理念…… ヒューマニズム (人文主義)

人間や自然をありのままにとらえようとする精神

その模範をギリシア・ローマ古典文化にもとめた

⇔中世の精神……キリスト教を中心とする、神への信仰と従順

※ルネサンスの二面性

自然科学的分野では、科学的批判精神による神学からの脱却

芸術的分野は、教会・貴族の保護の下で展開

教会の腐敗に対しては批判的だが、キリスト教信仰は薄れない

(1). イタリア・ルネサンス

契機 { イタリア諸都市の繁栄 (地中海貿易・毛織物業) ←十字軍以来
政治的分裂・混乱による中世的価値観の動揺
オスマン=トルコによるビザンツ帝国滅亡→学者たちのイタリア亡命

▶ 14c. フィレンツェ 中心 (毛織物、東方貿易、金融業で繁栄)

- ・文学 { ダンテ (1265-1321) 「神曲」
ラテン語ではなくトスカナ方言での長編詩。ルネサンスの先駆者。
ペトラルカ (1304-74) 「叙情詩集」
ボッカチオ (1313-75) 「デカメロン」(十日物語)、古い権威の風刺
- ・絵画 ジョット (1266-1337)

▶ 15c. フィレンツェ最盛期、メディチ 家のコジモ、ロレンツォの執政、学芸保護

- ・建築 ブルネレスキ (1377-1446) 聖マリア・デル・フィオーレ大聖堂円蓋
- ・絵画 ボッティチェリ (1444-1510) 「ヴィーナスの誕生」「春」
- ・彫刻 ドナテルロ (1386-1466)、ギベルティ (1378-1455)「天国の門」
- ・政治学 マキャヴェリ (1469-1527) 「君主論」

メディチ家独裁 VS 共和派 →フィレンツェ衰退

1494～98年、聖職者サヴォナローラがメディチ家追放し神政政治

▶ 16c. ローマ 中心……教皇による学芸保護、3大巨匠の時代

メディチ家の教皇2人 (レオ10世、クレメンズ7世)

ラファエロらによるローマ市発掘 (ただし遺跡の石材は復興のために再利用)

- ・ レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452-1519、“万能人”、種々の発明)
ヴィンチ村出身、ミラノ公の下で活躍、晩年はフランス王フランソワ1世に招かれる
「最後の晩餐」…ミラノ聖マリア・デレ・グラツィエ修道院食堂壁画
「モナ・リザ」…生涯手放さなかった謎多い傑作。ルーヴル美術館蔵
- ・ ミケランジェロ (1475-1564)
絵画 「最後の審判」…ヴァチカン、システィナ礼拝堂 正面祭壇画
「天地創造」…同上、天井画
彫刻 「ダヴィデ像」(フィレンツェ市庁舎前)
「ピエタ」(サン・ピエトロ大聖堂人口、未完成)
- ・ ラファエロ (1483-1520)
聖母子像を数多く製作、他に「教皇レオ10世肖像画」
「アテネの学堂」…ヴァチカン宮殿署名の間壁画

建築……ヴァチカン (カトリック総本部) の サン・ピエトロ大聖堂 再建

ブラマンテ (1444-1514) が最初に設計

→ ミケランジェロ が縮小施工

※この建築費用を集めるために贖宥状販売 → 宗教改革勃発

- ▶ ヴェネツィア (イタリア戦争に巻き込まれず)
 - ・ 画家ティツィアーノ (1490-1576) 「カール5世騎馬像」、祭壇画「聖母被昇天」

◆イタリア衰退

- ・ 1494-1559 **イタリア戦争**……国際関係の基軸はフランス王対ハプスブルク家
フランス王フランソワ1世、ハプスブルク家カール5世
- ・ 新航路の発見による地中海貿易の衰退

(2). その他の地域のルネサンス

狭義のルネサンスはイタリアに限定すべき。アルプス以北においては国民文化の形成

- ▶ ネーデルラント…毛織物・遠隔地商業で繁栄
 - ・ **エラスムス** (1469-1536) アルプス以北のルネサンス最大の人文主義者
「**愚神礼讃**」……教会の腐敗を批判、英のトマス・モアのもとに滞在中執筆
はじめルターを支持、しかし後に対立、カトリックからは終生離れず
 - ・ 絵画 **ブリュゲル** (1528-69) ……農民画家
ファン・アイク 兄弟 (兄フーベルト 1366-1426, 弟ヤン 1380-1441)
フランドル画派、油絵技法の創始
- ▶ ドイツ
 - ・ 絵画 **デューラー** (1471-1528、ニュルンベルク) 「**四人の使徒**」「マクシミリアン1世像」
ホルバイン (1497-1543) 「エラスムス像」「トマス・モア像」「ヘンリ8世像」

《国民文化》…各国の国王による中央集権化にともなう

- ▶ スペイン
 - ・ **セルバンテス** (1547-1616) ……「**ドン・キホーテ**」(滅び行く騎士道を風刺)
- ▶ イギリス
 - ・ チョーサー (1340-1400) 「**カンタベリー物語**」(「デカメロン」と同じ枠物語形式)
 - ・ **トマス・モア** (1478-1535) 「**ユートピア**」(“囲い込み”への批判)
エラスムスの友人、ヘンリ8世の離婚問題に反対
→大法官辞職・ロンドン塔に幽閉され処刑
 - ・ **シェイクスピア** (1564-1616) …世界最大の劇作家
4大悲劇「ハムレット」「オセロー」「マクベス」「リア王」など
- ▶ フランス
 - ・ ラブレール (1494-1553) 「**ガルガンチュアとパンタグリユエルの物語**」
自然児の巨人親子の素朴な生き方を描き、社会的因習を批判
 - ・ **モンテーニュ** (1533-92) 「**エッセー** (随想録)」
“私は何を知っているか (クセジュ)” →独断と偏見を避け、寛容の精神を説く

(3). 科学・技術

……キリスト教にとらわれない自然研究

- ・ 地動説
 - ・ **コペルニクス** (ポーランド、1473-1543)
 - ・ **ガリレイ** (イタリア、1564-1642、宗教裁判にかけられ生涯監視)
物体落下の実験、振り子の等時性、望遠鏡発明・惑星観察
 - ・ ジョルダノ=ブルーノ (イタリア、1548-1600、宗教裁判で火刑)
- ・ 惑星運行の法則……**ケプラー** (ドイツ、1571-1630)
- ・ 3大発明
 - ・ **火砲** (→戦法の変化、騎士の没落)
 - ・ **羅針盤** (→大航海時代)
 - ・ **活版印刷術** (紙の普及とともに新思想の流行の原動力に)
グーテンベルク (独、1400?-68) の発明

3. 宗教改革 (Reformation)

教会の腐敗・墮落への批判

中央集権を図る国王とカトリック教会との対立 (とくにイギリス)

自由を求める市民階級と教会勢力との対立 (カルヴァン派)

※ 贖宥状 (免罪符) 問題

14c.初頃から、教会への寄付により罪が消滅するとされるようになった。
1504年に、贖宥状総売上上の3分の1が教皇のものでしたが、
問題の1514年販売のものは2分の1が教皇のものでされていた。

王権による統一が進む英・仏では販売しにくいいため、ドイツで集中的に販売
→ドイツは「ローマの雌牛」。 フッガー一家が販売に協力した。

1514 教皇 レオ10世 (1513-21、メディチ家出身) が贖宥状販売
サン・ピエトロ大聖堂 建設資金調達のため

↓

(1). ルター (Martin Luther, 1483-1546、ヴィッテンベルク大学神学科教授)

1517.10.31 95箇条の論題 (Die 95 Thesen) を発表

教会による贖宥状販売を批判

「人は内面的悔い改めと福音の信仰によつてのみ救済される」と説く
=福音主義

ヴィッテンベルク大学附属教会の門扉にラテン語で掲げた。
=当初の意図は「聖職者間の純粋な神学論争」。教皇権威を否定する意志なし
↔しかし、何者かがこれをドイツ語に翻訳し、印刷術によって急速に広まる

1519 ライプツィヒ討論……教皇派の神学者エックとの論争の過程で教皇権威を否定

1520 『キリスト者の自由』を著す

1521 教会から破門される

// ヴォルムス 帝国議会

神聖ローマ皇帝 カール5世、ルターを召喚し自説撤回を求める
→ルターはこれを拒否し、帝国の法の保護外に置かれる

1521-22 ルター、聖書のドイツ語訳 (ザクセン選帝侯の保護下、ヴァルトブルク城にて)
教皇・皇帝に対立する諸侯がルターを支持

1524-25 ドイツ農民戦争 ……指導者 ミュンツァー

ルターは、はじめ農民に同情的だったが

農民の目的が領主権力の打倒と知ると、諸侯にこの鎮圧を勧告

ルターは、世俗の権力は神の創造によるものとして尊重し
純粋に信仰の世界の改革のみを考えていた。

※国際政治との関連……フランスと結ぶオスマン=トルコのオーストリア攻撃

1526 シュパイエル国会……皇帝カール5世、ルター派を承認し同派諸侯の援助を得る。

1529 再びシュパイエル国会でルター派禁止 (トルコによるウィーン包囲の直前)

→ルター派、抗議書 (Protestatio) 提出…… プロテスタント の呼称の由来

1546-47 シュマルカルデン 戦争

ルター派諸侯・都市がシュマルカルデン同盟結成し、皇帝・旧教勢力と内戦
(1531)

1555 アウクスブルクの宗教和議

諸侯・自由都市は、ルター派・カトリックのいずれかを選択
(個人の信仰の自由は無し。カルヴァン派は認めない。)

※その後、ルター派は北・東ドイツ (領邦教会制) の他、北欧諸国にも伝播

※ ツヴィングリ (スイス, Zwingli, 1484-1531) …… チューリヒにて改革運動
再洗礼派……幼児洗礼は無効。成人洗礼のみ有効とする (ミュンツァーも同様の立場)
→急進的で、ルターと妥協できず挫折

(2). カルヴァン (Calvin, 1509-64)

北フランス出身。1533年「突然の回心」で福音主義者に。
1535年スイスのバーゼルに亡命。 1536 「キリスト教綱要」を著す。

ジュネーヴにて宗教改革および市政改革に着手。ジュネーヴ大学創立

- ・教義的にはルターの聖書中心主義、福音主義を受け継ぐ
- ・教会の階層組織を否定……長老主義 (信者から選ばれた長老が牧師を補佐)
- ・予定説 ……魂が救済されるか否かは、あらかじめ決定されている
- ・職業召命観 (英 calling、独 Beruf、天職)

“神の栄光”を実現するために禁欲的に天職に専心した
その結果としての「富の蓄積」は救済の確信につながる、として肯定
→これが近代資本主義発生の一因となる
※マックス・ヴェーバー (1864-1920)「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

※カルヴァン派の呼称

ユグノー、ゴイセン、ピューリタン (清教徒)、プレスビテリアン (長老派)
(フランス) (オランダ) (イングランド) (スコットランド)

(3). イギリス国教会の成立

テューダー朝の絶対王政確立と一体の動き

- ▶ ヘンリ8世 (1509~47) ……教皇レオ10世から「信仰擁護者 (Defensor fidei)」の称号授与
しかし、王妃キャサリン (スペイン王家出身)との離婚で、カトリック教会と対立・破門

1534 首長法 (Act of Supremacy) 発布

国王が 国教会 (Anglican Church) の首長となる

カトリック教会領・修道院領を没収。

これをジェントリに配分し、彼らを地方行政に登用＝絶対王政の支持基盤

- ▶ エドワード6世 (1547~53、ヘンリ8世 第3王妃ジェーン・シーモアの子、幼少のため伯父が摂政)
プロテスタント的一般祈祷書 (Book of Common Prayer) 作成

- ▶ メアリ1世 (1553~58、ヘンリ8世の第1王妃キャサリンの子)
カトリック復活 ←スペイン王フェリペ2世の妃として

- ▶ エリザベス1世 (1558~1603、ヘンリ8世の離婚の原因たる第2王妃アン・ブーリンの子)

1559 統一法 (Act of Uniformity) 発布……国教会制度確立＝絶対王政確立

(4). 対抗宗教改革 (Counter Reformation) ……カトリック勢力の巻き返し

1545~63 トリエント公会議

教会の肃正・制度改革・教義の明確化

教皇至上権の確認、宗教裁判の強化 (→魔女狩り)

1534 イエズス会 創立

イグナティウス・ロヨラ、フランシスコ・ザビエルら

軍隊的規律で布教活動・異端弾圧

南ドイツやフランスにおいてカトリック勢力を回復

スペイン・ポルトガルの船でアジア・アメリカへ布教

→宗教戦争の続発……オランダ独立戦争、ユグノー戦争、三十年戦争 etc.